

本を選ぶ

NO.408 2019年(令和1年)5月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<https://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>こんびらさん

●司書の眼 第37回

●豊島区立中央図書館が発行する「図書館通信」

●鳥の目 第74回

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

こんびらさん

こんびら船々 追手に帆かけて

シユラシユシユシユ まわれば四国は
さんしゅうなかのごおり 讃州那珂の郡 ぞうずさん 象頭山 金毘羅大権現…

天候に恵まれた4月半ば。私は一生に一度は…と憧れていた、こんびら参りと日本最古の芝居小屋「かなまるざ金丸座」での「こんびら歌舞伎大芝居」見物の旅へ出かけた。

「さぬきのこんびらさん」と呼ばれ親しまれている香川県琴平町の金刀比羅宮は、象頭山中腹に鎮座する社で、石段を登る長い参道で知られている。その参道脇に建っているのが旧金毘羅大芝居「金丸座」だ。天保6年(1835)に建立された現存する日本最古の芝居小屋で、国の重要文化財に指定されている。

まるで江戸時代にタイムスリップしたかのようなその芝居小屋で、実際に歌舞伎を観てみたい。それが私の長年の夢であった。もちろんこんびらさんに参詣して、うどんも食べて…。江戸時代の昔から、庶民たちもこんなふうに胸躍らせて、全国からこんびら参りの旅へ出たのだろうか。幕府の禁令により自由に旅することができなかった庶民も、信仰の旅を名目に、寺社参詣をしながら名所旧跡をめぐり、茶屋で名物の菓子をつまんで物見遊山を楽しんだも

のらしい。こんびらさんへの旅は、今も昔も変わらない、庶民の一大イベントなのだ。

西村望監修、井上正三著『こんびら歌舞伎』（保育社／1996年）は、こんびらさんと大芝居の関わりから歴史、「金丸座」の見取り図までたくさんの写真入りで紹介されており、こんびらさんへの旅の気分を高めてくれる。

民謡「金毘羅船々」にも歌われている象頭山は、瀬戸内海を航行する船の目印となったことから、船頭さんらが海の守り神としてこんびら信仰を広めたという。江戸時代の中頃には、日本全国にこんびら参りの一大ブームが巻き起こった。それに伴い門前町としての街並みも整い、参道には旅宿や茶店、物売りの店が並び、町外れには市が立った。市では芝居や相撲、富くじなども盛んになり、こんびら門前町は、遊興の地としても発展していった。芝居がかかる度に仮設の芝居小屋を作っては壊しを繰り返していたが、やがて常設の芝居小屋「金毘羅大芝居」が建てられた。これが現在の場所へ移転復元された「金丸座」である。

さて、琴平駅に到着した私はまず、こんびらさんへお参りに向かった。奥社までの石段1368段をなんとか登りきり念願を果たすと、役者名を染め抜いた色とりどりの幟がはためく中、清々しい気分「金丸座」へ。檣幕やぐらまくを張り絵看板を飾った芝居小屋に、開場を知らせる太鼓が鳴り響く。わくわくしながら木戸をくぐると、人々の熱気に溢れかえっていた。まるで浮世絵でみた江戸時代の芝居見物そのものの光景であった。(ささきえり)

司書の眼 第37回

—メルカリも電子マネーも—

鷹野 祐子

電子マネーが便利

最近メルカリにはまっている。前々から気になっていたのだが、メルカリ内でしか売上金を回せないとか、現金化するには手数料を払うということだったので、手を出さなかった。最近になって、メルペイというスマホ決済サービスが始まり、メルカリの売り上げをメルペイにし、DoCoMoの電子マネーiDとしてコンビニなどの実店舗での支払いに使用できるようになった。簡単に言うとメルカリの売り上げが電子マネーになるってこと。また、メルペイに銀行口座からチャージすることもでき、月締め払いもできるので、スマホと銀行口座を持っていれば、簡単なクレジットカードみたいにつかえるのである。もちろん、メルカリに登録するときに、電話番号や銀行口座を記入するので、誰でも自由にということにはならないかもしれないが、小中学生でも持っているスマホでこういうことができるようになると、今後は犯罪が発生するかもしれない。実際に親に買ってもらったゲームカードを売買している小学生もいるという。

日本でいち早く開始されたSuicaなどの交通系の電子マネーは、現金で払うよりも安く便利この上ない。一番近い連絡改札もピッと一度するだけで、乗り換え完了である。こんなに便利な交通系電子マネーであるがしかし、試しに現金払いで京王線-JR南武線-東急線を乗り換えると、すべてを網羅する連絡切符はないので、直結の連絡改札は通れず、毎度毎度改札を一度出て、次の電鉄会社の券売機で切符を買うことになる。マスの便利の裏で、既存の現金がなんと不便になったことでしょう！

日本は現金至上主義と言われる。日銀のレポートによると、日本は現金利用率が極めて高く、交通系の電子マネーの利用が高いが、クレジットカードの保有枚数の高さ比べて、カード決済・デビットカード決済の金額は平均並みと低い。一般的に、

富裕層以外は日常生活で使う程度の少額の現金を持っているのではないかと思う。また、現金を封筒に小分けして管理する、袋分け家計簿などを提案する人もいる。実際に減っていく現金を見ることで、予算管理通り節約できるのだそう。コツコツ派の日本人が好きそうな節約法である。とはいっても、黒船Amazon、Yahoo、楽天などのオンラインショップや、大手スーパーのネット宅配がでてきたので、クレジットカードで日用品・食料品を決済する人も増えてきた。そして、安価な労働者不足が進んだ地元のスーパーやホームセンターではセルフレジ化が進んでいる。また、それぞれの会社のクレジットカード付ポイントカードを作った人も多いだろう。そう考えると、日本人はクレジットカードの保有枚数が多いという日銀レポートにも納得する。なにせ、各会社のクレジットカードだと、年1回利用で年会費が無料、さらにお買い物金額に応じてポイントがつくので、現金で払うよりお得。ということで、財布の中のカード枚数が増えていくのである。

メルカリも便利になった

さて、メルカリに登録すると、最初に100ポイントくらいがプレゼントされる。この金額でメルカリで何か買おうかな、と思っても買えない。なぜならメルカリの出品は300円以上なのである。出品者側から見ると、300円で出品すると、10%の30円が手数料として徴収される。送料は送料込にしても着払いにしてもいいのだが、買う人の側からみると送料込出品の方が購入しやすい。送料込にした場合、送付方法は各種選べるものの、メルカリに手数料を払った後の270円以上の送料だと赤字になってしまうので、定形・定形外郵便そしてメルカリ便から選択することになる。このメルカリ便というのが大変便利で、匿名配送を選ぶと出品者と落札者お互いの住所・氏名等を明かさずに取引ができる。発送もA4の封筒などに入れ

て、郵便局やコンビニに持参すると、アプリのQRコードを読み取ることで宛名表がレジで渡され、簡単に発送することができる。

数年前なら、ヤフオクなどでテンプレートを使ってオークションにかけ、出品から落札までドキドキしながら落札金額を見守っていた。そして無事落札されたら、相手の評価を気にしつつ入金確認、送付をしたものである。この結構面倒な手数と嫌な落札者との出会いもあったりして、しばらくはヤフオクから離れていた。しかし、メルカリは、値段は出品者の自由なので、商品の状態と売りたい気持ちで価格を付ける。また、本などは、バーコードで読み込むと書誌情報が反映され、このくらいが値ごろですよ、と教えてくれる機能も付いているので、初心者でも安心して出品できる。入金も、一度メルカリが徴収し、配送完了後に支払われる仕組みなので、お互い安心してまっていることができるのである。

ためしに、もう古紙回収に出そうと思って紐で縛っていた本を数冊出品してみたところ、なんと送料を引いても1600円くらいで売れてしまった。これじゃあ、某古書店には持っていきたくなくなるなあ。案の定、某古書店も次々に都内の店舗を閉めてしまった。

子どもに投資体験を

「物言う株主」村上世彰氏が子どもの金融教育のために「子どもの投資教育・実体験プロジェクト」を立ち上げた。

「お金は汚いものでも悪いものでもなく、ただの道具でしかない」ということを知ってもらいたい。そして、どうやってその道具を使うことで自分が幸せになれるのか、社会が元気になっていくのか、小さいころからお金と向き合い、慣れ親しんで、お金についていっぱい考えてもらいたい。そのきっかけとして、「投資体験」はまたとない機会になると信じています。

ということで子ども1人あたり最大10万円を与え、投資の経験を積んでもらう。利益が出たら、利益分がもらえる。損失がでたら残金を返金すれ

ばよい、ノーリスクな投資教育である。村上氏自身が、小学3年生のときに、大学までのお小遣いとして父親から100万円を渡され、それを投資した、という話は有名である。今は年間80万円まで非課税枠のあるジュニアNISAもあるし、学資保険の代わりに積立投資をされている保護者もいるかもしれない。20歳、大人になってから投資と投機を混乱し、にわか儲け話のカモにされるくらいなら、小さいうちから投資体験をして、株主として興味をもってニュースを聞くことで民間会社が動く仕組みを知り、労働と対価、消費と投資による世の中のバランスを理解するのはとてもいい教育だと思う。

Do The Hokey Pokey

子どもと電車に乗るときには、できるだけ本人が券売機で切符を購入するようにしている。それは、切符が必要になる小学校1年生から行えば、中学年ではかなり遠方でも自分で切符が購入できるようになる。その際、面倒でも領収書を出し、交通費の総額も計算させる。事前に時間があれば経路と交通費も調べさせておく。そうすることで日本中、世界中どこへいっても電車に乗れるようになるのだ。

一方、交通系電子マネーには、小児運賃のために小児用カードがある。料金をチャージして利用するので、親は電車賃をあらかじめチャージしておくのだが、1人で習い事に通えるようになると、その金額をいつのまにかコンビニや自動販売機などで使われてしまう。「小学生あるある話」である。こういう親子ケンカが起きないように、小児用カードには運賃にしか利用できないオプションを付けたほうがいい。ちなみに、こんな時は、なるべく必要最低限の低額をチャージするか、駅の券売機で利用履歴を印刷してその都度指摘していくと、子供も「使ったらばれる」ことを学習していく。Suicaにはメルペイを移行できるので、メルカリの売り上げで国内旅行というのも夢ではない。金銭教育には、任せること以外に「まめさ」が大事なのである。(たかの ゆうこ:医学系研究所図書室)

豊島区立中央図書館が発行する「図書館通信」

東京 23 区の西北部に位置する豊島区は、池袋駅を中心としてサンシャインなどの高層ビル群が立ち並び、全国で最も人口密度が高い、とても活気のある街です。

その豊島区の区立中央図書館では、「図書館通信」という読み応えのある通信誌を、10 年以上も発行されています。豊島区の「知」を集めたような内容の濃い通信誌を、図書館のどんな方々がどんな風に作られているのでしょうか？ 豊島区立中央図書館の企画調整グループの狩野由美子さんに、お話をうかがうことが出来ました。

*

「図書館通信」の創刊

豊島区立中央図書館は、東京メトロ東池袋駅から直結の大きな建物の 4 階と 5 階にあります。平成 19 年に現在の区役所近くに移設され、その開館に合わせて、新中央図書館広報戦略のために、「図書館通信」は創刊されました。

創刊号には、区長の高野之夫氏、当時の「豊島区図書館行政政策顧問」の故粕谷一希氏、「豊島区図書館専門研究員」のお三方の、新中央図書館に寄せる熱い想いが綴られています。『中央公論』編集長をしていた粕谷氏は、図書館の共同研究をされていた縁で、豊島区立図書館における文化政策発信の方策など図書館行政全般について助言や指導をする顧問に就任されたそうです。また、「図書館専門研究員」は、図書館における地域の文化情報の発信並びに調査・研究に関する機能を向上させるために設置され、「地域研究ゼミナール」（豊島区に関係の深いテーマについて、図書館の資料を活用し学びながら、自分の研究テーマを探すゼミナール）の講師をされているとのことでした。

計画段階から、区長、粕谷氏や専門研究員各氏、職員で、「どんな図書館にしていけるべきか？」が話し合われたそうですが、その取り組みの 1 つが、この「図書館通信」の発行でした。

図書館を情報を発信する場、地域の歴史や文化

を学び創造する場として運営していこうという豊島区の試みは、国内でも先駆的であったことと思います。階下の劇場、区立舞台芸術交流センター『あうるすぽっと』と図書館が一体となって文化芸術の創造と発信を目指したのです。

「図書館通信」の紙面から

隔月刊で始まった「図書館通信」は、A2判を半分に折った 4 ページの新聞で、それを封筒にも収まるコンパクトなサイズに 6 つ折りし、現在は季刊として発行されています。1～3 ページは連載や多彩なコラム、4 ページは図書館イベント情報と図書館カレンダーで、盛りだくさんの内容でいながら、すっきりと読みやすい紙面です。

編集会議では、専門研究員 3 名と館長、狩野さんら事務局 3 名で集まり、執筆者や新しい企画を決めていくそうです。「こんな方に執筆をお願いしたい」というリストには、常にたくさんのお名前が挙げられているとのことですが、バックナンバーを拝見すれば、出版関係の方、大学の先生、作家、区内外の図書館員、区民の方々などと、実にさまざまな方が寄稿されていて驚きます。

例えば、「こらこらコラム」で連載されているのは、ほぼ日の学校長／編集者の河野通和さん。「生涯の一冊」という創刊時からのコーナーは、最近では東京 2020 大会に合わせて、オリンピック・パラリンピック選手が本を紹介されています。また、あるテーマに沿った本を紹介する「この本カフェ」は、「としまコミュニティ大学」のゼミの先生の監修のもと、大学で学ぶ社会人「マナビト生」がお薦め本を 1 冊ずつ紹介しています。投書などは以前から随時募集していたそうですが、このように区民の方々の書評を掲載できるのはとても意義があり、嬉しいことだと狩野さんは話されていました。

そのほか、連載記事は、図書館で開催された講座の内容を伝えるテーマや、豊島区の魅力・情報



を発信できるものとなっています。「豊島区と童話」というコラムでは、近代日本児童文化史がご専門の浅岡靖央さんが、豊島区に発祥した『赤い鳥』運動や自由教育運動につ

いて書いています。建築史がご専門の石樽督和さんによる、地域研究ゼミナールの「池袋のヤマ市」も、若い方々にとっても反響があったそうです。また「豊島区とマンガ」では、「としま南長崎トキワ荘 協働プロジェクト協議会」の小出幹雄さんが、手塚治虫など豊島区に暮らしていたマンガ家たちについて、教えてくれました。

まさに、豊島区にゆかりのある興味深い話題は尽きることがありませんね。たくさんの人々が暮らし、活動し、新しい文化を生み出していく。この地域にみなぎるパワーに触れた気がしました。

広がる図書館の役割

中央図書館内では、豊島区が選定された「東アジア文化都市2019」（日中韓の3か国から、文化芸術による発展をめざす都市を毎年1都市選定し、年間を通して多様な文化芸術イベントを開催し、3か国の文化交流を図る国家的プロジェクト）にちなんで、中国開催地の「西安展」を開催し、書架で「日中韓の文学特集」、児童コーナーでも中韓の本を紹介する棚が設けられていました。「図書館通信」でも4回にわたるシリーズで、交流都市やプロジェクトが紹介されています。

狩野さんは、「図書館通信」のほかに講座の企画運営や、上記のような館内展示も担当され、「学習活動を支え、情報提供を行うことによって、地域の課題解決や地域の振興を図る」をモットーに人と情報、人と本、人と人をつなぐ日々を送られているようです。

豊島区の図書館は、区の組織では「文化商工部

という、文化・観光施策や美術館・文化・スポーツ施設を管轄する部に「図書館課」としておかれています。区の文化政策や事業に連動した企画が図書館で活発に行われていることは、豊島区ならではの注目すべき取り組みと感じました。

「図書館通信」を支えるもの

中央図書館では、「図書館通信」を中央の展示コーナーに並べています。最新号だけでなくバックナンバーもいつの間になくなっていて定期的に補充をされているそうです。図書館に来る方々が、楽しみに持ち帰られるのでしょう。区内では、各図書館や区役所、各区民ひろばなどで配布され、都内・都下の図書館にも送っているそうです。講座などに区外から申し込まれる方もいるとのこと、ほかの図書館でも一般の方が閲覧できるように置かれているのかもしれませんが。

狩野さんに、「図書館通信」のこれからについてうかがうと、「区民の方々と共にあります。通信を読んでいただきたいし、書いていただきたい」という言葉が返ってきました。そのためにも、紙面は、文字を大きく読みやすいものを心掛けているそうです。また、書いていただく方にも負担にならないよう、記事は800文字程度までと決めているとか。

さらに、「文字にして残すことに大切さがあると思っています。WEBでは気軽にアップして後から修正できますが、紙媒体では掲載したままのものが残り、より慎重が必要になります」ともおっしゃっていました。

豊島区の大きな文化政策と連携しながらも、図書館に通う個々の方々、区民の方々の声を意識されている通信作り。図書館が積極的に地域の魅力を発掘し、地域の方々にアピールしていく中で、多くの相乗効果があり、新しい文化の誕生もあるのではと思われました。(LAS探検隊)

*「図書館通信」のバックナンバーは豊島区のHPからもご覧になれます。

<http://www.city.toshima.lg.jp/146/bunka/shogai/toshokan/kankobutsu/index.html>

鳥の目 74

—カワセミが幻だった頃(つづき)—

為貞 真人

神秘的な光は神代から

青く光り水辺を一直線に飛翔するカワセミは、古来日本各地で住民の目を引き付けてきたようです。『古事記』上巻の「大国主命」の段で大国主命が旅立つ大后（おおきさき）須勢理毘売命（すせりひめのみこと）に贈った歌に「そにどりの青き御衣（みけし）をま具（つぶさ）に取り装い」という詞があります。本居宣長の『古事記伝』では、「そにどり」は鳩鳥で青の枕詞だとあり、また同じ『古事記』の「葦原中国（あしはらのなかつくに）の平定」の段では翠鳥（そにどり）が御食人（みけびと）として現れ、日本書紀には鳩（そに）とあり、これも川世美（かわせみ）で、小微（しょうび）、曾比（そび）、世美（せみ）などはみな「そに」の訛りだと説明されています。

カワセミの各地の古称を見ると、シャウピン（四国）、ショニ（備前・作州）、スドリ（中国・防州）、シャウニン（播州）、カハセミ（京都）、セビ（大和）、ソナ（仙台）、ルリ（出羽）、ソビナ（甲斐）、ジョナ（下総）、エビトリ（駿河・沼津）、ヒスイ（薩摩）などじつに多彩で、光沢のある背の鮮やかな青色が昔から全国的に注目の的だったことが分かります。（『古事類縁 48 動物部』）

カワセミの幻影

道夫がはちきれそうな胸のうずきを感じながら待ち望んだカワセミのひなの巣立ちが絶望的になりました。雨があがって西日に赤く蒸れた崖の巣穴を見つめているうち、ふいに巣の中のひなの様子が見たいという抑えがたい衝動が道夫を駆り立てました。道夫は蹴で崖の赤土に挑み、巣穴のまわりの土も一緒に削り落としていきました。予想以上に奥深い巣穴で、掘り進むほど産座は奥に逃げていきます。大きな石にぶつかったとき、「道夫！」と背後から父の声がしました。「鳥は本能的に危険を感じとれば、巣を捨てることに少しも躊躇せん」「鳥が生きていくうえでの大事な知恵じゃ」と、掘ることをやめる

よう強く言いました。

道夫はもう少し掘らせてと頼みましたが、聞き入れられません。道夫は軽いめまいに似た「蕩揺」を覚え、「顔をあげた刹那、チーツとちいさな啼き声がして、巣穴から翡翠の炎が閃きで」ました。それは「青竹を一気に断ち割っていくような鮮烈な羽搏き」でした。「父さん、今親鳥が翔び出していったね。一声啼いて」という高ぶった道夫の言葉に、父はしずかにかぶりをふりました。「いや、わしは見も、聞きもせんかった。…」小説はここで終わりますが、カワセミの幻影は道夫から消えることはなかったでしょう。

戻ってきたカワセミ

戦後、仁部富之助の『野の鳥の生態』（大修館書店 1979年 全5巻）は自然や野鳥を愛する多くの人に大きな影響を与えましたが、戦前の1936年にすでに1巻本として『野の鳥の生態』（巣林書房）が出版され、大戦中の1941年から43年にかけて日新書院から3巻本として出版され、文部省優良図書に選ばれています。その中でカワセミの営巣や育すうについての丹念な観察の記述があります。こうした当時の進んだ「野鳥情報」が、小説『カワセミ』における道夫の鳥好きの父のカワセミについての知見や巣づくりへの強い関心につながっていても不思議ではありません。

戦後1960-70年代にかけて都市部を中心に河川の汚染やコンクリートによる護岸でカワセミが生息場所を追われ、都市周辺から姿を消しました。

70年代初め一種の動物ブームが起り、1971年3月、『週刊世界動物百科』（朝日新聞社）と『アニマルライフ 週刊動物の大世界百科』（日本メール・オーダー社）が発刊されました。「現代文明の生んだ公害のために、動植物は生息する環境を失いつつある」（朝日新聞社発刊のことば）との危機感の中で、カワセミは河川の環境保護の象徴的存在でした。まさに魚狗（『大和本草』）の登場です。

70年代、公害や環境破壊が大きな社会問題となりますが、その後水質改善が進んだ川では80年代から大都市でもカワセミの姿が見られるようになりました。

こうした中で、嶋田忠の写真集『カワセミ—清流に翔ぶ』（平凡社／1979年）など一連の写真や映像を通して、カワセミのひすい色の美しさや水中ダイブのほとぼしる鮮烈さを市民の多くが実感するところとなりました。1989年「新潮」発表の岡子英雄の『カワセミ』には、こうしたカワセミの生活圏での再生とその躍動美の可視化を背景にして、カワセミへの

少年期の純な感動と道夫の目に焼き付いているカワセミの幻影を呼び戻したいという作者の思いが感じとられます。

ちなみに、作者の岡子英雄は1933年3月生まれで愛媛県西条市の出身です。かりに作者が6年生の道夫のモデルだとすれば、小説の舞台は、終戦の前年の1944年、愛媛県の瀬戸内海沿岸の町が相当です。偶然ですが瀬戸内海を挟んだ広島県の山間の同学年だった私として、同類の少年の情念と失意に懐かしさを覚えないわけにはいきません。

（ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会）